

歯学部生の今

歯学科2年 内田 俊

「くそ。」何食わぬ顔でボソッとつぶやき診療室を出て、私の隣をすり抜けていった男性には、右足がなかった。その背中は何かに焦って、何かに追われているようだった。同情とは少し違う、なんとも言えない心苦しさを胸がいっぱいになった。ああ、この人も精一杯生きているんだな、と。「くそ。」その一言に込められた思いはなんだったのであろう。思うように歩けないからそうつぶやいたのか、ただの口癖なのか、真相は不明だが、常日頃からさまざまな患者さんがいる病院を通路として使っている私にとってこれほど印象的だった患者さんはいない。それ以降、自分は目の前に患者さんがいたら、本当にその心に添えるのかと自問自答を繰り返している。心の底からその人の身の上になって、些細な一言まで気を配り、その感情をともしることができるのか。「歯が痛い」「歯がしみる」などの謎の解明と一生付き合う歯科医師を生業として長い人生を送っていきけるのかと。

歯科医師という職業は命には直結しないようにも思える。歯を削っても血は出ないし、歯を抜いたところで入れ歯や冠ブリッジなどの治療でカバーできる。ではなぜ私たちは今全身の骨や筋、血管や内臓、また神経や細胞についてなどの勉強をしているのだろうか。正直今の段階ではいまいち分からないが、はっきりとわかることは「医師たるもの、知識不足は許されない。」ということ

だ。知らない病名の診断、知らない治療、知らない材料の説明なんて出来るはずもない。「知らない」ということは許されない。これから先実際の臨床の場において様々な知識を使うようになるだろう。そのひとつひとつの知識に対しての理由、つまり知識の理由を今学んでいる段階であると私たちは日々の授業の中で少なからず感じている。

私の周りの仲間は将来何を志しているのだろうか。過疎地域に行きまともな医療を受けられない方のためにその崇高な知識と緻密な技術を提供するのか、実家に帰り親のあとを継いで開業医となるのか、はたまた大学に残り研究を行いこれから生まれてくる何万人もの命を救えるような大発見をするのだろうか。私たち歯学科2年生40名はこれから先それぞれの道を歩いていく。あと約5年間で各々がそれぞれのビジョンを構築していくのだろうが、そのために私たちは今座学身に身を挺している。座学以外だと早期臨床実習Ⅱといって主に歯科治療の見学実習や人工歯を試しに削ってみるなどといった初歩中の初歩の学習である。クラスは男女問わずいい人間関係を築けていてとても居心地がいい環境である。勉強に部活、アルバイトとともに充実した日々を送っているが、今しかできないことを大切にし、様々な社会経験を詰んで、自他のためになるような大学生活をこれからも送っていきたい。

まっせ

歯学科3年 山本 悠

突然ではあるが、以下の文章を上から順に読んで頂きたい。飛ばし読みはせず、順々に、意味が出来るだけ推測しながら読んで頂きたい。

「お隣さんが近すぎると、ギスギスして、時には押しのけ合いもする」

「上と下でよくぶつかり合う」

「昔はとんがってても、年々丸くなっていく」

「子供はいなくなったりするし、屋根に上ったりする」

「動物もいるし、道具もある」

「いるところは、ジメジメ」

これらの文章は特に意味のないものだ、と思うかもしれないが、次の言葉で何かが起こるかもしれない。「歯」

「歯」をいう前に分かってしまった人もいるかもしれないが、「歯」という言葉で、意味のなかったように感じたものすべてが、繋がったと思う。初めは、点と点で一見関係のないようなモノ同士が、ひとたび繋がると、意味をなし、新たなモノも見えてくる。

さて、長い前ふりは終わりにさせて頂き、歯学生の今について書かせて頂きます。拙い文章ではありますが、最後まで読んで頂くと幸いです。

今、一番感じることは「つながり」である。勉学も人でも。

先日、顎顔面再建学で同郷の先生方のご厚意で、オペを見学させて頂いた。舌癌の手術であった。術式は、今の私には理解できなかったが、切除する舌、そこを栄養する動静脈、支配する神経、周囲の筋、神経、動静脈、その他組織は理解できた。なぜ理解できたのかというと、解剖学を学んでいたからである。3年生では、御献体、御遺族のご理解、善意により解剖実習という形で、体の

全組織（神経、脈管、骨、臓器など）を実際に解剖して、観察をし、勉強をさせて頂いている。

多くの学生に共通することかもしれないが、今学んでいることが、将来とどのように関係があるのかと、もやもやを感じている人もいると思う。以前の私もそうであった。しかしどうだろう。オペを見学させて頂くにつれ、「つながった」と感じはじめた。今学んでいることが、臨床とリンクしていると、自分自身で感じる事が出来た。そのときの気持ちは、うまく表現ができないが、うれしい、という言葉が一番近いと思う。今学んでいることの「点」と臨床という「点」とがつながることで、それぞれの意味も理解でき、新たな何かも見えてきた。3年生になり、そう感じる事であった。例えば摂食嚥下リハビリテーション学の勉強会に参加させて頂いたときは、主に生理学、解剖学と、微生物感染症学の研究室で課外活動として実験をさせて頂いたときには、授業内容や感染症関連のニュースと。繋がりを感じたことは、あげればきりが無いほどある。点と点の距離は、近いものもあれば遠いものもあるかもしれない、しかし、いったん繋がると、必ず何か見えてくる。

ヒトとヒトもそうである。個という点がつながる、つまり出会うことで、新たな何かが見えてくる。4月に近くの神社で御神輿に参加させて頂いた。参加に至った経緯は、飲み屋さんのカウンターで隣に座っていた方に誘われた、というものである。その神輿会には、色々な職業の方がいて、歯科関連の方もいた。御神輿を担ぐという貴重な体験ができただけでなく、様々なお話も聞くことが出来き、とても楽しく、普段とは異なる視点のお話は、特に有意義だった。普段の生活では、歯科を含む医療系以外の方と話す機会はほとんどない上に、「こういう考え、モノの見方があるんだ」と思うことは、それ以上ない。先述の

先生方も同郷という繋がりであるし、研究室、勉強会に行かせて頂くのも繋がりである。このような、人と人の繋がりからも、新しいモノが見えてきた。

「勉強も人も、繋がると何かが見えてくる」これを、自分の身をもって知ることが出来たのは、私にとって非常にプラスになった。

最後に、私の歯学部ニュースは名言で閉めるとするのが、毎年の流れである。今年はこの言葉で閉めたいと思う。読んで頂きありがとうございました。

「MUST SAY (まっせ) ~言わなければならない~」



歯学生の今

歯学科4年 川 邊 万記翁

私は今締め切り直前の作家の気分を味わっています。1ヶ月程前に原稿の依頼を頂いた時は早めに仕上げようと思っていたのですが、まだ時間があると延ばしに延ばしているうちに、ついには提出日前日、正確に言えばつい先程提出日当日に日付が変わってしまいました。タイトルは『歯学生の今』、文章を書くのが苦手な私に1,500字埋めるのは並大抵のことではなく、以前友人に相談した際の「個人トレーの制作手順をレポートすれば(笑)」という冗談がとても魅力的な案に思えてきてすらいます。とはいえさすがに実行するわけにもいかないので、私なりに『歯学生の今』を伝えていきたいと思います。

まずは講義についてですが、3年生までのように今日は午後がない、あるいは2限からだ、なんて日は1日ありません。基本的には実習と講義で1週間が埋まっている状態です。1週間の授業の大まかな流れを説明しますと、月曜日から歯冠修復学の講義及び実習、火曜日は歯周病学・口腔病理学、水曜日は欠損補綴学の実習、木曜日は有床義歯学・予防歯科学、金曜日は成長発育学(小児歯科学・矯正歯科学)となっています。歯冠修復学ではインレー・クラウンの製作実習を行い、欠損補綴学では全部床義歯の製作実習を行いました。皆が、というと語弊があるかもしれませんが、やはり多くの方が「実習がキツイ」と言います。実習前には予習用動画を見てあらかじめその日に行う作業を把握しておく必要があり、これを怠るとその日の作業の流れがうまく理解できず、スムーズに実習を行うことができません。また、予習し作業内容を理解したとしても、思うように手が動かなかったり段取りが悪かったりでなかなか自分が思うようにいかないこともあります。しかし、歯科の仕事に直結している実習だけに、避けて通るわけにはいきません。どんなに不器用で

あっても正しい手順に従い作業を繰り返せば必ずその成果は現れるはずなので、できるようになるまで回数を重ねて実習を頑張らなくてはと思います。とはいえ、やはり実習には多少のストレスを感じることもあってか、水曜を過ぎるとホッと、皆とても晴れやかな顔をしているように思います。

また、内科学、外科学のような隣接医学の講義もあります。歯科を受診する患者さんは必ずしも口腔内にのみ問題を有しているわけではありません。特に高齢化の進む現代では糖尿病などの生活習慣病を患っている方もいますし、自分でも気づかないうちに何らかの感染症に罹っているといったことも起こりえます。そうした現状を鑑みると、歯科だから口腔内のことだけ知っていれば良いということはありません、一医療者として最低限の知識は持っておかなくてはなりません。実習や歯科関連の講義を重視しがちではありますがこうした講義も将来歯科医師になる私達には必要なものであることを理解し、講義に臨むことが重要であると感じています。

せっくなのでクラスの雰囲気についても触れておこうと思います。といっても特筆すべきことはありません、普通に仲が良いです。歯学部では他の学部と異なり、2年次以降は全員が同じ講義を受けることになるため、共有する時間が多くなります。また、3年次の人体解剖学実習をはじめとして様々な困難(主に実習)をともに乗り越えてきたという想いがあり、仲間意識が強いです。と、私から見たらとても良い感じにまとまっているように思うのですが、そう見えないこともあるようです。私達の学年では、教室の右半分は男性陣、左半分は女性陣といったように教室中央に境界線を引いたようにはっきり別れて座っているために、最初の授業の時に驚く先生が複数おられま

した。でも冷戦とかそういうことはありません、仲良いので心配しないでくださいね（笑）。専門的な講義や実習に追われ、大変なことも多々ありますがこれからも皆で頑張っていきたいと思います。

現在締め切りの約1時間前、なんとか文章を書き終えることができ、ホッとしています。私の拙い文章をここまで読んでいただきほんとうにありがとうございました。



歯学生の今

歯学科5年 鈴木 兼一郎

お久しぶりです。今年も歯学部での生活について自分が感じたことを書いていきたいと思えます。今年も5年になり、臨床予備実習(ポリクリ)が始まりました。その実習では5年後期から始まる臨床実習の前に行う臨床を意識した実習となっている。そのため治療の見学など、外来の場に出ることが多くなり、今までの実習とは違い緊張感をもって実習に臨んでいる。さまざまな科を回って、臨床と講義で習ったことが必ずしも一致でないということを感じ、臨床ではより患者様に快適に治療を受けてもらえるように対応しなければならないということを実感した。それには医学という学問の前に、相手への心遣いや分かりやすい説明など、基本的なコミュニケーション能力が重要だと思った。どんなに治療が上手くても、相手としっかりとしたコミュニケーションが成り立っていないければ、意味がない。しかし、医学的な知識なしには治療をすることができない。ポリクリを通して、どのようなことが臨床の場では求められるのか、どのような知識が必要かを理解できたのではないかと考えている。そのため、後期から患者様の治療をするために十分な知識も必要となる。ポリクリの期間中に必要な知識を勉強し、十分に準備してから望めるようにしたい。コミュニケーション能力については、勉強して身に付くものではないと考えている。まだ入学して間もない1、2年生には特に言いたいことであるが、5年に上がる前に日々の生活の中で会話する力、話を聞く力などコミュニケーション能力を身に付けてほしいと思う。それから、5年の8月の下旬にはCBTというテストがあり、この試験に合格しなければ、臨床実習に出ることができない。臨床に出るための最低限の知識を問われる試験である。そして、この試験の合格点数は国家試験の可否に

も関係性があるようなので、合格することを目的にするのではなくより高い点数を取れるように、残りの期間も勉強に励んでいきたい。

ここで、これまでの4年間を振り返ってみたい。歯学部ニュースを書き始め5回目となり、クラスでは歯学部ニュース係となっている。原稿の依頼については、クラスの幹事から直接来るシステムになっている。これまでの5回の中で1回でも歯学部ニュースに自分が書いた原稿を載せてみたいと思った人がいるならば、この場を借りて謝罪したいと思う。そして、来年書いてみたいと思っている人、残念ながらそれは無理である。なぜならこの件の話は自分にしか伝わってこないの、あなたの耳に原稿依頼の話が届くことは、おそらく来年もない。しかし、この歯学部ニュースのおかげで自分は自分の成長を毎年見返すことができると共に、僅かしかなかった文章構成力も少しは上がったのではないかと感じている。話は変わるが、新潟大学全学部の中で1番夏休みの期間が短い歯学部であるが、ついに今年その夏休みがなくなった。そして春休みもなくなる。医学部も含め他の学部は2ヶ月ある夏休みだが、歯学部は2年から1ヶ月。今年も夏休みはあるが、CBTがあるため事実上はなし。春休み期間は臨床実習があるので、今後の長期休みは冬休みのみとなる。臨床実習などで、他の大学に比べ、臨床の場で経験が積めるので不満はない。しかし、学生中に海外旅行などを計画している4年生以下の皆にはこう言いたい。旅行は4年までの長期休みで済ませておくこと。5年でも不可能ではないが、そのためには相当前からCBTの勉強を始めておく必要があると思う。4年生の皆、特に1年生には残り何回かある長期休みを有意義に過ごして欲しいと思う。

歯学生の今

歯学科6年 國分 冴子

昨年からたびたびTED Talksを見るようになった。学術・エンターテイメント・デザインなど様々な分野の人物によるプレゼンテーションを動画で見ることができる。

“Where good ideas come from?”

—Steven Johnson

私の最もお気に入りのプレゼンのひとつである。Stevenはイノベーションとなるような革新的なアイデアはどのようにして生まれるかについて提案する。定説を覆すような発明は偉人たちの突然のひらめきによると考えられがちである。しかし偉人たちが実際には元になるアイデアを少しずつ成熟させ、やっとひらめきの瞬間を迎えるまでの途方もない年月について語ろうとしなかったという事実はあまり知られていない。ダーウィンが自然選択説に至るまで数十年間アイデアを少しずつ記したノートが発見されたことはこれの良い一例である。

ある科学者が革新的なアイデアが生まれる環境について調査し記録したところ、それらは圧倒的にミーティングやデータを互いに共有している会話の最中であることが分かった。異なるバックグラウンドを持つ者同士がざっくばらんに話す空間はアイデアが流動的に行き来しあうネットワークの構築を可能にし、数多くのイノベーションが起こった。実例として20世紀を代表する発明であるGPS誕生の秘話をあげている。GPSはあらゆる業界のトップクラスの技術者が結集してできたと語られる。つまりイノベーションは多くの人々がお互いに議論を重ねるうちにアイデアが化学反応のようにカップリングすることで必然的に生まれるのである。

臨床実習がはじまって早10ヶ月、もう終わりに近付いている。1年前の自分と比較して自分自身、成長できたなどと大きい口を叩く気にはなれ

ない。しかしただひとつだけ、決定的な変化があったとすれば『自分ひとりではできることなんてほとんど何もない』と気づいたことだった。

臨床実習はまず何よりも、協力してくださる患者さんの存在がなければ成立しえない。3時間もかかる治療に付き合ってもらい、こちらが本気で申し訳ない気持ちを伝えると「仕方ないよ、次もよろしくね」といってユニットを去り、また次の診療には時間通りにきて下さる。感謝の気持ちを伝えるのにどんな言葉を使ったらよいのかわからず、かえっていつもよりも無口になってしまった。

ライターの先生方の厳しさに始めは少し戸惑うこともあった。しかし先生方の指導はどんなときもこちらが申し訳なくなるほど丁寧だった。自分が書いたものに対し赤ペンで一語一句訂正し、またなぜダメなのかまで説明して下さった。先生方との会話では教科書を何度読んでもわからなかったことが嘘のように分かるときもあった。また人と話をするとき、何がわからないのか論点を明確にし、資料をそろえ、かつ自分はこう思うという意見をもったうえで臨むスキルも学んだ。

仲間の存在も大きかった。以前にやったことのある友達にどうやるのか、何が必要かなどをきく



と自分のことのように親切に教えてくれた。時には実習での悩みを共有し、何でもない会話が大笑いして元気になれた。

家に帰ってひとりしていると世の中のほとんどの同年代が働いている中、応援してくれる家族が支えてくれるから今こうやって自分は学生生活を送れていることにはたと気づくこともあった。

臨床実習は大変だった。もう嫌だ、と何度思ったか分からない。それでも患者さん、先生方、クラスの人と話すのは面白かったし、楽しかった。たった12ヶ月では臨床的なスキルはほとんど変わらないかもしれないが、周囲の人々と気持ちよく過ごすために大切ないろはを多少なりとも学んだと思う。何度となく自分ひとりの無力さに落胆した一方で、手をさしのべてくれる人々の優しさが身にしみ、また誰かと何かをしたとき一人では決

して得られないパワーを感じた。

イノベーションは大げさだが、どうせやるなら複数の人々が集まったほうがすごいことができるような気がする。必要な人にちゃんと届くように人と人を繋げていくだけでも何か新しいことができるかもしれない。自分に能力はないけれど、有能な人々がお互いの実力を発揮して協力し合える環境を整えていくようなことをしてみたいと密かに思うようになった。

プレゼンの最後をStevenはこの一言でしめくくっている。

“Chance favors the connected mind.”

訳そうとして、『和を以て尊しと為す』という言葉思い出した。周囲のすべての人々に感謝し、残りの実習をすごしたいと思う。



臨床実習を経験して

歯学科6年 関 根 彩央里

新潟大学に入学して、友人や先輩達の話から、5年生になると大変そうと教えられてきました。何が大変なのかも分からず実感のない漠然とした不安をいだいて、楽しい新潟大学生生活の4年6ヶ月が瞬く間に過ぎ去りました。

5年生10月になり、引継ぎ期間が始まりました。私は、基本ともいべき早期臨床実習システムからして良くわかりませんでした。6年生の先輩の患者さんに対する対応や治療、先生への報告などをてきぱきとこなしている姿は素晴らしく大きく見え、私も出来るのだろうかと不安に押しつぶされてしまいました。そのような私に、先輩方は優しく、一から十まで丁寧に教えてくださりました。診療に当たる先生方は、自分の患者さんを診療、研究を進められたうえで、学生に指導をされています。先生が常に忙しい中でも厳しい研究を貫いていらっしゃる姿を間近で感じることができました。そのような日々の体験が頑張らなければと励みになりました。改めて新潟大学で勉強できて良かったと感謝しています。

臨床実習に出て「臨床に絶対はない。」と講義で教えていただいた言葉の意味が理解できました。実際様々な症状を持つ患者さんがいました。多角的な観点から患者さんの病状を観察すると複数の治療方法の選択肢が生じ、どのような治療方法をとるべきかと悩みました。的確な治療を行うには、勉強することが重要であることを臨床実習を通して分かりました。

私が今まで1番印象に残っている診療は、引継ぎ期間中に1人で行う最初の診療だった抜歯です。抜歯実習の前日は緊張を和らげるため、レポートを読み直し、縫合の練習、頭の中で当日のシュミレーションの3点を幾度となく行いました。それだけ準備したにもかかわらず当日患者さんを待っている間、緊張のあまり診療ユニットの

椅子に座りこんでしまいました。しかし、患者さんの顔を見た瞬間、自分の不安な姿を見せてはいけないと思い、平常通り明るく接し、前日まで準備したことをやるだけだと気持ちをどっしりかまえ落ち着くことができました。今後もこの時の緊張を忘れることなく、診療にいかしていきたいと考えています。

6年生になり、クラスメートは1人ひとり異なる症状を持つ患者さんを担当しています。診療するためのレポートを作り、プレチェック、技工物などの締切りに追われる毎日です。私はその日の診療を終え、技工室に戻るとホッとします。技工室にクラスメートがいるので、上手くいかない時はお互いの苦労や悩みを話し解決策を考え、わからないことは教えあっています。失敗し落ち込んでいるときもクラスメートの励ましでモチベーションが上がり、次に向かうことができます。私はクラスメートに恵まれたお蔭でこれまで頑張ってきたと思います。クラスメートのみんなに感謝しています。

そして6年生は進路を考える時期でもあります。マッチング、国家試験、それに対する対策を講じたりとやることが数多くあります。人生の岐路に立ち、改めて自分は将来何をしたいのか、考



えがまとまらず思い悩みました。友人や先輩や両親に相談したり、先生にアドバイスを頂いたり、やっと自分の将来の進む方向性が定まってきました。

また、学生として最後の年。学生にしかできないことをしたいと思っています。医局説明会を通

して先生方とお話したり、クラスメートと食事をしたりお酒を飲んだり、旅行、学生最後の夏休みも満喫したいと、やりたいことが数多くあります。残り少ない貴重な「今」を充実させたいと考えています。



歯学生の今

口腔生命福祉学科2年 村山未帆

五十嵐キャンパスでの1年間の教養課程が終了し、旭町キャンパスでの専門科目の授業が始まって早くも4カ月が経とうとしています。初めは新しい環境への変化とこれから始まる専門の勉強に期待と不安でいっぱいでした。最近では生活にも慣れ、充実した毎日を送っています。

現在、授業は歯科についての内容がメインで、PBLという問題発見解決型学習法という形態が中心に学習が進んでいます。今まで私達が小中高と受けてきた授業形態は先生から知識を教えていただくというものでしたが、PBLは少人数グループに分かれて行われ、毎回異なった臨床シナリオを基に自分達で疑問を見つけ出し、仮説や学習課題を立て、図書館の文献や教科書を使って調べ学習を行い、それぞれが調べてきたことを発表しあって解決方法を見つけ出すという学生が主体の勉強法です。最初は初めて行う方法に右も左も分からず戸惑っていましたが、回数を重ねていくうちに徐々に慣れてきて、少しずつではありますが初めの頃よりスムーズに議論を進められるようになってきたと思います。自分の専門的な知識がほとんど無く、疑問で頭が一杯になったところから調べ学習がスタートするためとても大変なのですが、その一方で多くの発見があり、分からない所や疑問を持った所を自分の納得がいくまでとことん調べ、理解していく楽しさがあります。そして歯科衛生士、社会福祉士いずれも人を相手にする職業であるため、自分の意見を相手に的確に分かりやすく伝える言語能力だけでなく、相手の話に耳を傾け理解する能力やグループの中で互いに議論を交わし解決方法を見出していくスキルなど現場に出た時に必要となる様々な能力を養うために日々悪戦苦戦しながらも、向上心を持って学習に取り組んでいます。

また、多くの実習や講演を通して机上では知り得ない現場の雰囲気、職員の方々の様子や生の声を聞くことができ、大変貴重な経験になったと同時にぼんやりとしていた将来について考えるきっかけにもなりました。以前は歯科衛生士のイメージとして、歯科診療の補助が中心でその治療の前後に歯磨き指導や歯石取りを行うのが主な仕事だと思っていました。しかし実習を通して、訪問歯科や栄養サポートチームとしての多職種連携、周術期口腔管理の取り組みなど歯科の診療科での仕事に留まることなく、病棟や福祉施設、企業、在宅介護の方の家など様々な場所で活躍することができ、活動の幅が大きく広がっている非常に可能性を持った職業なのだと感じました。また現在口腔ケアを行うことで全身の様々な疾患の予防につながるということが大変期待されています。予防や口腔保健管理には多くの時間を要し定期的でかつ継続的なメンテナンスが必要不可欠となりますが、人々が健康で豊かな生活を送るといったQOLの向上に口腔ケアは大きな役割を果たし、それらを担っていくのは歯科衛生士であるということを感じ、歯科衛生士という職業に魅力と誇りを感じました。

最後になりますが、私たち口腔生命福祉学科2年生は女子19名仲が良く、笑顔の絶えないクラスで、毎日楽しく生活しています。学生の本業は言うまでもなく勉学ですが、学生である今しかできない部活動やサークル活動、アルバイト、ボランティアなどにも精一杯取り組み、そこから得られた経験や人とのつながりを大切にして充実した学校生活にしたいと思います。これからは19名という少ない人数ではありますが、だからこそ互いに切磋琢磨し高めあいながら、それぞれの夢や目標に向かって日々精進していきたいと思っています。

歯学部生の今（3年）

口腔生命福祉学科3年 森山 奏

グラサン、黒パーカーの出で立ち、手には段ボールの銃（私が作った）。

「ハーハッハッ！俺様はバイキン！甘いものが、だ〜いすき!!!」

そして夏休みの遊園地のステージを彷彿とさせる歯ブラシマンとバイキン親分の戦闘シーン。ヒーローが一度敵に負けそうになるお決まりの演出。「負けるな、歯ブラシマ〜ン!!」…そんな愉快的劇を24人で作り上げ臨んだ6月のあさひ幼稚園の歯磨き指導実習。園児の反応はすべてが思い通りだったわけではなかったが（バイキン親分の武器に対しての反応がとても良かったことに関して私としては非常に満足。）、それでも園児たちが楽しんでくれ、努力が報われたと感じた。また、自分たちも貴重な経験をさせていただくことが出来た。先生方もリハーサルに対してたくさん意見を出してくださり、それらを元にして次のリハーサルに向けてひたすら練習を繰り返す放課後、昼休み。入学してから2年と少し、24人で過ごしてきたが、思い起こせば皆で一つのものを作り上げたのは初めてだったかもしれない。それも含めて、それぞれにとって実りあるものとなったに違いない。

3年になってからの変化といえば、教室が広くなったこと、朝が早くなったこと、編入生が6人来たこと（足して30人という学科で過去最高人

数）、髪が黒くなったこと、そして何よりも病院見学実習が始まったこと、社会福祉の授業が本格的に始まったことである。病院見学では、主に病院のDHさんにつかせていただき、その治療や保健指導の内容などを学ぶというものである。今、相互実習では超音波スケーラーを用いたPMTC、浸潤麻酔下で手用スケーラーを用いたSRPなどと様々な実習を行っている。そのような基礎・相互実習で学んだことを、実際の臨床の場で見学させていただき、自分の技術をさらに高めていくことが出来る。社会福祉の授業に関しては、講義で学び、PBLでさらに理解を深めている。再来年に迫りくる社会福祉士の国家試験は、昨年度の全国の合格率が27.5%という狭き門ではあるが、日々の学習を積み重ねて、全員合格を目指していきたい。

個人的な変化といえば、手話サークルの部長にやらせていただいたこと、クラス幹事になったこと、音ゲーのしすぎで視力が落ちたこと、この年にもなってポ○モンシールを集め始めたこと…とまだまだここでは言えないような様々なことがあったが、そんな私の今年度の抱負は「何事にも積極的に！」である。3年になり、先生方からの情報や先輩からのお誘いなどでボランティア活動に参加する機会が増えたように感じる。先日もALS患者さんのイベントのお手伝いをさせてい



ただいた。また、福祉に関する勉強会、シンポジウム、福祉事務所の見学、訪問歯科のお手伝いなどと自分が積極的に外へと目を向けるだけでこんなにもバリエアブルなもので溢れかえっているのだと気付くことが出来た。このように残された2年もない大学生活を有意義なものにできるように、勉学によりいっそう励みつつ3年のうちに色々な経験を積んで自分の人間性を高めていきたい。

4年生になると金曜を除く毎日が病院での臨床実習または福祉現場実習、加えて特論など、先輩方は非常にお忙しくされている。私たちは今の状況でも毎日四苦八苦なのに（休み時間はうつぶせで寝ている人が半数以上を占める）、これから9

月のテストをパスして（特に福祉の授業は覚えることが非常に多いのでパスできるかはいささか疑問ではあるが…）、後期からまたさらに忙しくなると聞いている。ダブルライセンスゆえの多忙さではあるだろうが、そのようなつらいときでも学科全員で支えあって乗り越えていきたい。「こんな学年初めて」と主に良くない意味で多方面から言われる私たち9期生ではあるが、良い意味でその言葉をかけていただけようになる日もそう遠くないと信じて頑張ろう9期生。歯ブラシマンのように勇敢に、かっこよく、強い心で目の前の手強い敵（当面は夏休み明けのテスト）にぶつかっていきたいと思う今日この頃である。



歯学生の今 —編入生として学ぶ—

口腔生命福祉学科4年 縄田 理佳

♪僕らの生まれてくる ずっとずっと前にはもう アポロ11号は月に行ったというのに♪とポール・ノグラフィティは歌っていますが、そのアポロ11号と同年ながら編入学しました縄田です。

もちろん、一緒に学ぶ同級生とは親子ほどの年齢差はありますが、同じ釜の飯を食う（古語ですね）仲間として、違和感なく(?) 溶けこみ、毎日ワイワイ騒ぎながら学生生活を満喫しています。他に、新潟県ならではの能楽研究会に所属し、謡や仕舞のお稽古に勤しみ、摂食嚥下機能回復部の特別養護老人ホーム「恵風園」での口腔ケアボランティアに、クラスの有志と交代で帯同させていただいています。

まず、私が編入学する前のことについてお話します。私は歯科衛生士として10年間岐阜県歯科医師会が無歯科医地区での歯科保健活動や障がい者施設での歯科治療を行う巡回歯科診療と障がい者歯科診療所の業務に携わってきました。その後、嘱託職員として障がい者歯科診療所に引き続き5年間勤務し、更に病院・小児歯科・一般歯科・市町村保健センター等で、トータル20数年間歯科衛生士を続けてきました。どの職場でも、先輩歯科衛生士の皆様は、不勉強で無知な私に、根気よく何度も丁寧にご指導くださり、その時に得た知識・技術のすべてが私の宝物です。

ところで、編入生はどんなことを勉強してるの?と聞かれることがよくありますが、歯科衛生士免許を取得しているため3年次の授業は、福祉系科目がほとんどで歯科系科目は1科目のみとなります。じゃあ、他の学生が基礎実習等を行っている時は、何してるの?とこれまたよく聞かれますが、必修科目(教養科目)4科目を受講していました。それでも空き時間があるため、希望する歯学科の講義を3科目受講していました。さらに、後期には毎週水曜日に小児歯科・障がい者歯科と摂食嚥下機能回復部で医歯学総合病院ならではの研修をさせていただきました。これらはコーディネートしてくださった学科の先生方と研修をご快諾くださった諸先生方のご厚意の賜物です。この場を借りて深謝申し上げます。また、試験の時は、年々巨大化する頭の中の「消しゴム」が大活躍し、慣れない法制度や用語に悪戦苦闘しましたが、優しくご指導くださる教員の先生や同級生の全力のフォローがあったお蔭で無事に進級できました。

4年次は、編入生も同じカリキュラムとなり、医歯学総合病院での臨床実習と、福祉施設での社会福祉現場実習があり、並行してPBL、講義、卒論に相当する特論に取り組む傍ら、歯科衛生士・社会福祉士国試対策、就職活動を行います。



昨年、大学でソーシャルワークについて学び、クライアントのニーズの範囲は生活や生き方そのものであり、どう生きていくのかを自己決定するための全人的支援が最重要であることがわかりました。

特に、15年間携わっていた障がい者歯科には様々な障がいのある方とご家族の方の悩みが、むし歯や歯周病などの歯科疾患や障がいによる疾患や病態だけではなく、年を重ねる毎に、家族介護ができなくなった時の生活全般についてと変化していく過程を見てきました。実際に、定期健診を受けていた方もご家族の入院等により、中断しその後の生活がどうなっているのかが把握できなくなるが多くなっていきました。今後は社会福祉士のライセンスを得ることで、このような事例を減らすための医療と福祉の架け橋になればと考えています。

どんな職種であっても、「その患者様（クライアント）がその人らしい人生を送るために最大限のサポートをしたい」という想いは同じであり、それがどのように行われているのかを今後の病院・福祉施設双方での実習を通じて学んでいきたいと思っています。

